
fade out

猪名川 有意

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a d e o u t

【Nコード】

N 8 1 9 3 F

【作者名】

猪名川 有意

【あらすじ】

彼は、宇宙人に造られたロボットだった。彼は、ココロを知らなかった。そんな彼の日記とそれを読む彼女の話

家に帰ってきて、私は一冊のノートを取り出した。
それは彼がつけていた日記だった。

「我々にはコピーがある。こっちは君が持つべきだ。」
彼の上司さんはそう言ってこの日記をくれたのだ。
ページを、めくる。

『2000X年8月31日。本日より当機は起動した。』

まるでパソコンで打った文字のように無機質な字だ。
私は彼らしいな、と思い少し微笑んだ。

だが、『当機』という言葉を見て彼がロボットであつた事を痛感した。

別に彼が言つた事を疑っていたわけではない。

ただ心の奥底で、彼が私と同じ人であつて欲しいと願っていただけだ。

私はもう一度ノートに目を落とした。

『早速任務の報告、及び記録のため日記をつけることにする。
だが、起動してすぐに報告するようなことは無い。

よつて本日は確認のため、当機の任務について記そうと思う。
当機の目的は近年滅亡へと向かう地球に住む人間、地球人は救うに
あたいするか否かを判断することである。

救うにあたいされると判断されれば、我々は地球人を救う。
だが救うにあたいしないと判断されれば、我々はそれ相応の対処を
取ることになっている。

いや、我々というのはおかしい。

当機はただ、任務のために造り出され任務が終われば破棄されるただの道具である。

よって当機を造り上げた創造主と当機を『我々』という風に一つに括るのは間違っているであろう。

当機の創造主というのは地球人が言うところの『宇宙人』である。

地球人の大半は、そういった『宇宙人』の存在を信じてはいない。

信じていない方が動きやすいのでいいが、地球人は生物がいるのは地球だけなどと思っているのであろうか。

宇宙には数え切れないほどの星があるのだ。

地球のように生物が生まれ、生きていくことができる星がたった一つも無いなんて事ある筈がないだろうに。

話がずれてしまった。

今日は此処までにしておく事にする。』

『9月1日

本日より本格的な調査に入った。

学校に入り込み、地球人の観察をする。

本日のみでの観察の結果を記す。

一つ目 地球人は二つのタイプにわかれている。

派手なタイプと、地味なタイプである。

当機は地味な方に入るようだ。

二つ目 時間さえあれば友人と喋り続ける。

よくあんなに話す事が尽きないものだ。

しかも担任教師が連絡事項を述べている間も話を止めない者もいる。

五月蠅くて連絡事項が聞き取れない。

誰も困らないのだろうか。

最後に、『音』が大きすぎる事。
当機に付けられた機能の一つ。
人の本質を『音』として聞き取る機能。
その『音』が無駄に大きい。
何故大きいのかはまだよくわからないが、調査する価値はあると思う。

以上が、本日の調査結果である。
まだまだ不明な点があるが、まだ1日目なので今後の課題が出来たということでしょう。』

私はその後も日記を読み続けた。
殆どが、私達の日常を書いておかしい部分を指摘しているものだった。
ふと、私の手が止まる。

『9月16日』

私と彼が出会った日だ。
彼は、私と会ったときどう思ったのだろう。
私は緊張しながら再び日記に目を落とした。

『本日は不思議な者に出会った。
当機がいつものように昼休みに人気の無い屋上に来た時の事であった。

扉を開けると、先客がいた。
当機は思わず立ち止まってしまった。
彼女から聞こえてきた『音』があまりにも綺麗だったのだ。
鈴のような『音』でそんなに大きな『音』では無かったが、はつき

りとあたりに響いていた。
こんな『音』は初めてだ。

今、思い出しただけでも心が洗われるような気がする。
立ち止まっている当機に気付いた彼女と少し話したが、他の者との
違いがよくわからない。

この違いがわからなければ、地球人の評価がつけにくい。

明日は図書室でいくつか文献を借りてくることにする。

地球人が書き記したものだ。

何かヒントが載っているかもしれない。

兎に角、明日の行動の予定も立てれたので本日は此処までとする。』

鈴のような音、か。

そんな『音』がする、と教えられてはいたがこんなにも高く評価し
ていたとは驚きだ。

少し．．いや、かなり嬉しい。

思わず顔がにやけてしまいそうだ。

『9月17日

また、彼女に会った。

どうやら図書委員だったようだ。

あちらは気付いていないようなので、当機は本来の目的を遂行する。
借りれるのは最大3冊までなので、この場でいくつか読んでおく。

もうすぐ昼休みが終わる頃に、当機は3冊の文献を借りた。

借りる時、彼女は当機に気付いたらしく笑って話しかけてきた。

3冊全てジャンルが違っていたようで、彼女は少し驚いていた。

あと、何故か面白い人だという評価を頂いた。

当機は観察用機械だ。

人を楽しませる機能はついていない。

よって彼女の発言は理解不能。
いや、地球人の面白いと感じるところは創造主達とは違うのかもしれない。

人は無表情の人間に良い印象を抱かないはずなのだが。」

ああ、そうだった。

殆ど誰も来ない状態の図書室で無表情に恋愛小説と、料理の本さらに『初めての将棋』をさも当然のように借りにくる様はシュールだったのでそう言った気がする。

私は、どんどんページを捲っていった。

そういえばあんな事もあったなあとか、あの時こんな事を思ってたんだとか思いながらひたすら読み続ける。

そして日記の最後、12月14日がきた。

私からすると、一昨日の事である。

『12月14日

今日は何故か体がだるい。

一瞬風邪かと思ったが、当機は病原体が進入しても機械なので問題ない事を思い出した。

彼女に会ってから人の思考が少しうつってしまったようだ。

ふと、日記を見返すと彼女がよく出てくることに気づいた。

困った。

あまり一定の人間と接触し続けていると、思考の中立性が保てなくなってしまう。

如何するべきか。

いっそ事情を全部話してしまおうか。

確か、人間は異端を嫌うはずだ。

話せば彼女はもう話かけてこないかもしれない。

悪くても、頭がおかしいと距離を置くだろう。
それなら彼女も傷つかない。

だが、何故だろうか。

彼女が離れる事が嫌だと思ってしまう。

恐らくエラーだろう。

明日学校から帰ったらメンテナンスを頼もう。

そうと決まったところで、もう今日は寝る事にする。』

此处で、日記は終わっていた。

日記帳はまだ三分の一度残っているのが悲しい。

私は、昨日の事を思い出した。

昼休みいつものように屋上に行くと、彼は既にパンを食べていた。
おかしい。

いつもどちらかが来るまで食べないのが暗黙のルールだったのに。
何か急ぎの用事でもあるのかな、と思って訊ねたが彼は沈黙だけしか返さなかった。

仕方なくお弁当を黙々と食べる。

彼は食べ終わると立ち上がり、私に自分が宇宙人に造られた事や地球に來た理由を告げた。

始めは何かの冗談だと思っていた。

でも、彼の表情はいつになく真剣で何かに怯えているように見えた。
だから、私は

「そっか。ありがとう。秘密なのに私に教えてくれて。」
信じて、受け入れた。

彼は、泣いた。

目から涙を流して静かに泣いた。

「なん、で？泣いて．．？」

「嬉しいからじゃ、ないかな？」

彼は、一瞬目を見開いたが納得したように笑った。

「そう、か。これが、嬉しい。これが．．ココロ！！」

彼は泣きながら笑って、そして崩れ落ちた。

私はすぐさま駆け寄って彼を呼んだ。

「あ、あああああああああ！！！」

彼が、苦しそうに叫ぶ。

何度も何度も呼びかけるが、彼は答えず叫び続ける。

「え、えらー、はっせい。えらーはっせい。」

本当の、機械のような声だった。

「ごめ、ん．．俺には、機械、には．．ココロは、重すぎるみた、いだ。」

「や、やだ．．何、言っつ！？」

彼は、私の口を手で優しく塞ぎ見たこともない位の笑顔を私に向けた。

「これ、で．．いい。ココロを理解すること、が．．出来たんだ。だから、いい。」

そして彼は最期にこう言った。

「ありがとう。」と

その後彼の上司を名乗る人が現れ、彼を連れて行ってしまった。

まあ少し前に日記を渡すために家まで来たんだけれど．．

「読み終わったようだな。」

私が日記を閉じると後ろから声がした。

いつの間に部屋に入ってきたんだろうか。

そこにいたのは彼の上司だった。

「君に、上の決定を伝えようと思ってね。」

何だろうと上司の方へ振り返る。

「上は、地球人を滅ぼすことにした。」

その言葉に驚く暇もなく、私の視界は歪んだ。

「せめて、あいつにココロをくれた君ぐらいは・・・」

痛みも、絶望も感じる事無く逝かせてやろう。」

最期に、そう聞こえた気がした。

その後の世界がどうなったかは、知らない。

（後書き）

大晦日に短編投稿。

これってSFで良いんですよね？

いや、良いことにしよう（オイ

今回は大変でした。

書き始めたのが確か10月。

そして書く書くこうと思いつつ、結局中々進まずにもう大晦日。
何より文字数が多い。

今まで二千、三千ばかりだったのに・

さすがに疲れました。

多いの書ける方は偉大ですね。

以上、猪名川有意でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8193f/>

fade out

2010年10月19日12時08分発行